

15:12 ところで、キリストは死者の中からよみがえられたと宣べ伝えられているのに、どうして、あなたがたの中に、死者の復活はないと言う人たちがいるのですか。

15:13 もし死者の復活がないとしたら、キリストもよみがえらなかつたでしょう。

15:14 そして、キリストがよみがえらなかつたとしたら、私たちの宣教は空しく、あなたがたの信仰も空しいものとなります。

15:15 私たちは神についての偽証人ということにさえなります。なぜなら、かりに死者がよみがえらないとしたら、神はキリストをよみがえらせなかつたはずなのに、私たちは神がキリストをよみがえらせたと言って、神に逆らう証言をしたことになるからです。

15:16 もし死者がよみがえらないとしたら、キリストもよみがえらなかつたでしょう。

15:17 そして、もしキリストがよみがえらなかつたとしたら、あなたがたの信仰は空しく、あなたがたは今もなお自分の罪の中にいます。

15:18 そうだとしたら、キリストにあつて眠つた者たちは、滅んでしまったこととなります。

15:19 もし私たちが、この地上のいのちにおいてのみ、キリストに望みを抱いているのなら、私たちはすべての人の中で一番哀れな者です。

#### <説教>

本日は私たちの主、イエス・キリストの復活節（イースター）です。

この日（だけでなく、今後生涯にわたって、いや更には永遠にですが）私たちは復活（よみがえり）の主イエス・キリストを崇め、またキリストを死者の中からよみがえらせなかつた父なる神を礼拝するのです。

今からおよそ 2000 年近く前、キリストは私たちの罪をその身に負われ、私たちの罪のために十字架の上で死んでくださいました。

そのようにしてキリストは、私たちが私たちの罪の故に神から受けるべき死の刑罰（最後の審判で私たちが神から受けるべき神の永遠の怒り、のろい、地獄の刑罰）を私たちの代わりに、私たちのために受けてくださいました。

そのようにしてキリストは人間として神に完全に従順な罪無き生涯を送られました。

それもまた私たちの代わりに、私たちのためにでした。

でもそれだけではありません。

そのように人間として本当に完全に死なれ、墓に葬られたキリストは三日目に死者の中からよみがえられ（復活し）たのです。

こうしてキリストは死（とその原因である罪）に対して完全に勝利なさいました。

もしキリストが十字架で死なれたただけだつたとしたら、それは確かに私たちの罪のためでしたから大変有り難いことではあつたでしょうが、いわばそれで終わりです。

キリストもさすがに死（とその原因である罪）に勝つことはできなかつたことになってしまいます。

同時に、キリストをこの地上にお遣わしになつた神も死と罪には勝てなかつたことになってしまいます。

しかしもちろん真の神はそんな無力無能ではありません。

不可能なことはこれっぽちもなく、死よりも強い、全能のお方です。

神がキリストを死者の中からよみがえらせました。

この厳然たる事実が、あの、死を恐れ、人を恐れてイエスを知らないと三度も否定し、イエスを見捨てて逃げてしまい、隠れていたペテロを始めとする使徒たち（後にパウロも含めて）の命を賭けた福音宣教の力の源でした。

ペテロもパウロも、使徒たちは自らを「キリストの復活の証人」と呼び、「神はイエス・キリストをよみがえらせた」と何度も何度も事あるごとに力強く確信をもって証しし、宣べ伝えました（使徒 2,3,4,5,10,13,17 の各章参照。I コリント 15:3-8）。

本日の聖書で〈キリストは死者の中からよみがえられたと宣べ伝えられている〉（I コリント 15:12）とは、そういうことです。

そう宣べ伝えられ、そのように信じられているはずのコリント教会の中に〈死者の復活はないという人たち〉がいたのです。

ここで問題となっている〈死者の復活〉とは、「死者となったキリスト者の肉体をもつての復活」ということです。

「靈魂は神聖で永遠不滅、肉体は下劣」というギリシア思想の影響でしょうか、キリスト者の「からだのよみがえり」を否定する人たちがコリント教会の中にいたのです。

それで、〈キリストは死者の中からよみがえられた〉ことが事実なのだから〈死者の復活〉も事実あるのだ、とパウロは力を込めて反論するのです。

〈もし死者の復活がないとしたら、キリストもよみがえらなかつたでしょう。〉（13）とはそういうことです。

言葉を変えて言えば、「キリスト者（の死者）の復活」と「キリストの復活」は切り離すことができない、いわば一体のことだということなのです。

「キリストの復活」が基礎となって「キリスト者の復活」がある、ということなのです。

キリストが十字架で死なれ、死に打ち勝ってよみがえられたからこそ、キリストを信じてキリストのものとされたキリスト者も、キリストとともに死んでキリストとともに死に勝利してキリストと同じようからだをもつて復活するのです。

もし、〈キリストがよみがえらなかつたとしたら、私たちの宣教は空しく、あなたがたの信仰も空しいものとなります。〉（14）

〈空しい〉とは「中身がない」、「無駄」（15:10,58）ということなのです。

イエス・キリストの福音は神から私たちへの贈り物（プレゼント）だとはよく言われることですが、もし〈キリストがよみがえらなかつたとしたら〉とは、例えて言うなら、その贈り物の入れ物の外側は立派で美しく素晴らしいけど、蓋を開けてみたら中は空（から）だったようなものです。

見てくれが立派なだけに、中身がなかつたときの失望はむしろ一層大きいようなものです。

キリストの十字架に至るまでの生涯は素晴らしく、キリストが私たちの罪のために死んでくださったこともまた有り難いことでした。

でももしそれで終わりだったら、美しく感動的なお話しにはなるでしょうが、復活という中身がなければ、「イエスは立派な人だったけど結局は若くして惜しくも殺されてしま

った」、「やっぱり死んだら終わり」「死には勝てなかった」ということになったでしょう。

人のために自分を犠牲にして道徳的、倫理的に正しく生きようということを否定するものではありません（それがキリストに倣ってということならますますそうです。またキリスト者であってもなくても、そういう真面目で真剣な生き方は尊重されるべきです）が、やはり問題は最終的な「死」の問題です。

私たちの魂もからだも、ともに罪から清め、もう神の最終審判によって滅びることのない永遠のいのち、復活のキリストのいのちを私たちキリスト者に与えるために神は御子イエス・キリストをこの地上にお遣わしになったのです。

キリストを十字架で死なせたのは私たちのための神のみこころでしたが、その死なれたキリストをよみがえらせたのもまた私たちキリストを信じる者たちのための神のみこころによることでした。

だから、（もし〈キリストがよみがえらなかつたとしたら〉）、〈私たちは神についての偽証人ということにさえなります。なぜなら、かりに死者がよみがえらなかつたとしたら、神はキリストをよみがえらせなかつたはずなのに、私たちは神がキリストをよみがえらせたと言って、神に逆らう証言をしたことになるからです。〉（15）

復活のキリストに出会ったペテロやパウロたちがキリストの故のあらゆる苦難を耐え忍んで、〈神についての偽証人〉として〈神に逆ら〉い、偽りを語り人をだまして生きること命を賭けたとは絶対に考えられないことです。

もう一度言います。〈もし死者がよみがえらなかつたとしたら、キリストもよみがえらなかつたでしょう。〉（16）

〈そして、もしキリストがよみがえらなかつたとしたら、あなたがたの信仰は空しく、あなたがたは今もなお自分の罪の中にいます。そうだとしたら、キリストにあつて眠つた者たちは、滅んでしまったことになります。〉（17,18）

〈今もなお自分の罪の中にいます〉とは言い換えれば「まだ罪赦されていない」「まだ罪から解放されていない」「依然として罪に支配された、罪の奴隷のままである」ということ、または「まだ義と認められていない」ということです。

パウロはローマ人への手紙で次のように言います。

〈すなわち、私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる私たちも、義と認められるのです。主イエスは、私たちの背きの罪のゆえに死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられました。〉（ローマ 4:24b,25）

〈もしキリストがよみがえらなかつたとしたら、〉キリストはただ単に〈私たちの背きの罪のゆえに死に渡され〉ただけ、神にのろわれ、神に捨てられて死んだだけで、神から義と認めてもらえなかつたということになってしまいます。

または、せっかく神のみこころに完全に従つて私たちの罪のために十字架で死なれたのに「なぜか」神に受け入れてもらえなかつた、義と認めてもらえなかつた、ということになってしまいます。

もしそんなキリストなら、私たちにご自分の義を分け与え、私たちを罪の支配から救い出し、義の支配に移し入れてくださることなど到底できません。

神によってよみがえらせていただけなかつたキリストを、またキリストをよみがえらなかつた神をいくら私たちが信じて、そんなキリスト者なら私たちは〈今もなお自分の

罪の中にいることになるのです。

また、そんなキリストなら、〈キリストにあって眠った者たち〉つまり、そんなキリストを信じて死んだ人々の罪は赦されておらず、義と認められておらず、それ故永遠のいのちに与ることができず、永遠に〈滅んでしまった〉と言うほかないことになるのです。

〈もし私たちが、この地上のいのちにおいてのみ、キリストに望みを抱いているのなら、〉とパウロは言います。(19)

つまり〈もしキリストがよみがえらなかったとしたら〉、即ち〈もし死者がよみがえらないとしたら〉、私たちは〈この地上のいのちにおいてのみ、キリストに望みを抱いている〉者ということになります。

私たちのキリストにかける望みが〈この地上のいのちにおいてのみ〉なら、どうなるほかないのか、この後じきにパウロは示します。

〈もし死者がよみがえらないのなら、「食べたり飲んだりしようではないか。どうせ、明日は死ぬのだから」ということになります。〉(15:32b)と

つまり「死んだら一卷の終わり」であって、そこには死に打ち勝ち、死を乗り越える最終的な希望がありません。

復活のキリストに出会う前のペテロほかの弟子たちのように、結局は人を恐れ、世間の目や評判を気にし、死ぬことを恐れて生きるほかありません。

『人に従うより神に従うべき』だなんて言って世間や学校や会社や国の言うことに逆らえば『食べたり飲んだり』さえできないように干されてしまう」と恐れ、「自分のいのちを救おう」と妥協してしまうことになります。

「わたしのためにいのちを失う者はそれを見出すのです」と約束なさった復活のイエス・キリストに信頼しなければ、またイエス・キリストを死者の中からよみがえらせた神を信頼しないのなら、〈この地上のいのちにおいてのみ〉生きることを目指すしかありません。

そうなれば、「自分を捨て、自分の十字架を負って」イエス・キリストに従って行くという生き方は全くできないか、やろうとしても全く不徹底、不十分、口先だけになるほかないでしょう。

〈もしキリストがよみがえらなかったとしたら〉、〈もし死者がよみがえらないとしたら、〉キリストを信じて「自分を捨て、自分の十字架を負って」キリストに従って〈この地上のいのち〉を生きるキリスト者は確かに〈すべての人の中で一番哀れな者です。〉(19)

しかし、確かに事実〈キリストは死者の中からよみがえられた〉のです。

ですから、私たちキリスト者の〈死者の復活〉も確実にあるのです。

「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。あなたは、このことを信じますか。」(ヨハネ 11:25,26)

こう言われるよみがえりの主イエス・キリストを信じ、キリストをよみがえらせた神を信じて、罪赦され、〈死んでも生きる〉キリストの復活のいのち(永遠のいのち)をいただき、感謝と喜びをもって人を恐れずキリストに従い、キリストの復活の証人として生き、キリストの栄光を現す私たちであるように願い、神のお恵みを祈ります。